

# 緑爽会会報 No. 185

2023年4月24日発行  
日本山岳会 緑爽会  
発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

## 2023 年度緑爽会総会報告

開催日： 4月8日(土曜) 出席：19名  
会場： 広尾ガーデンヒルズ集会室  
出席者：梨羽時春、松本恒廣、近藤緑、吉田理一、平野紀子、鳥橋祥子、  
中條昌子、大島洋子、島田稔、小清水敏昌、辻橋明子、富澤克禮、竹中  
彰、田井具世、渡邊貞信、石塚嘉一、中村好至恵、荒井正人、小林敏博

2019 年度総会開催の後、ずっと書面での審議となっていた総会でしたが、3月13日よりマスクの着用が個人判断になるなど、新型コロナウイルスの鎮静化もあり、3年ぶりのリアルでの総会開催となりました。ルーム使用上の人数制限は無くなりましたが、第3土曜日は本部の関係で使用できず、中條会員のご厚意で上記集会室をお借りすることができました。

総会は11時に荒井代表の開会挨拶、議事進行で始まり、下記議案について、第1・3号議案は小林副代表より、第2・4号議案は渡邊会計より説明が行われ、いずれも承認されました。

- 第1号議案 2022年度 事業報告承認の件
- 第2号議案 2022年度 収支決算承認の件
- 第3号議案 2023年度 事業計画(案)承認の件
- 第4号議案 2023年度 予算(案)承認の件

なお、2025年に創立30周年を迎えますので、今年度はその準備期間と位置づけ、記念事業について検討を行っていくこととします。(議案書は会報に同封します)

会場となった集会室は落ち着いた色調で、各テーブルに二人掛けでちょうど「コの字」に座れる広さでした。中條会員には感謝申し上げます。審議の後、皆さんから短時間でしたが近況などお話いただき、集合写真を撮影して総会を終了としました。

### 目次

- 《報告》  
2023 年度緑爽会総会報告  
皆さんからの近況  
新年度に当たって  
3月山行「鐘撞堂山」  
(横関邦子)  
鐘撞堂山を登る (島田稔)  
2月芳賀さんのお話を聞く会
- 《寄稿・投稿》  
緑爽会創設の頃の会員の想い  
出(2) (関塚貞亨)
- 《20世紀初頭の東京》②  
《山岳会発祥の場所・富士見楼》 (南川金一)
- 人は何処かで繋がっている  
(夏原寿一)
- 雑誌「山の本」の休刊  
(南川金一)
- 《ようこそルームへ》  
「歩くスキー」の命名  
(夏原寿一)  
続・チョウが冬に羽化  
(荒井正人)
- 《予告など》  
編集後記

質疑応答や意見、提案については次の通りです。

○予算案上、通信費を半減以下の水準とした根拠は？ → ① 2022年度はルームが使用できないことなどにより、会報での告知以



外に書面・ハガキでの通知が多かったが、それが新年度は少なくなる。②新年度の会報の送付形態としてメール添付のみでの送付会員が相当数あり、郵送費は減少する。これらを根拠として算定した。

○30周年記念事業への提案として「記念誌的なものを作成することになると思うが、在籍会員のみならず、退会していても、会運営で活躍された方の記録・歴史も収めてはどうか。」→検討会の中で考えて行きたい。

○会員入会勧誘への提案として「今の日本山岳会のホームページで緑爽会を見ても、どういう会なのか分からないので、そこを改善してはどうか」→ホームページの一層の活用を考えていく。

※なお、会員名簿の下段のある「○印名誉会員」の表記について質問があり、修正します。

(報告：荒井正人 写真撮影：石塚嘉一)



後列左から、小清水敏昌、竹中彰、小林敏博、平野紀子、荒井正人、渡邊貞信、石塚嘉一  
中列左から、鳥橋祥子、中條昌子、富澤克禮、吉田理一、大島洋子、中村好至恵  
前列左から、梨羽時春、松本恒廣、田井具世、近藤緑、島田稔、辻橋明子

会員の近況 (皆様からいただいた近況です。早い時期に書いていただいた返信もあります。)

- 山口 節子 貸会議室探し、会員の皆さんへのお知らせ、当日の準備等々、折角ルームがあるのに大変なことですね。お世話をおかけし、本当にありがとうございます。当方、神経痛の痛みから解放されましたが、貧血症と加齢は修復不可能。プーチンにゴマメの歯ぎしりしつつ、2歩歩いて忘れ、勘ちがい、物忘れ、、、と、毎日笑って暮らしています。雪山を見たい！
- 山本 良子 すっかり御無沙汰しております。夏の終りから体調をくずし検査やら投薬がはじまってしまいました。暖かさと共に復調の兆しとなりつつありますが、もう少しエコー検査などが予定され、少し足踏み状態です。夏には参加出来るようになりたいです。皆様どうぞよろしくお願い致します。幹事の皆さまお世話になります。
- 田村佐喜子 先日の芳賀様の会の時はお世話になりました。今度は他の会と重なり、どうしても出席できません。申し訳ございませんが、よろしくお願いいいたします。
- 五十嶋一晃 妻の介護の傍ら、来年出版予定の薬師岳・奥黒部にかかわる本の執筆中であります。
- 梨羽 時春 80歳を超えてから腰痛で歩行が困難になり、山は登れなくなりました。耳も眼も頭もボヤケて余り外出しなくなりました。
- 松本 恒廣 登山用具としてのストックとは別に、文字通り歩行補助用の杖を買わざるを得なくなりました。「転ばぬ先の杖」のつもりですが、、、。
- 佐藤 淳志 総会のととき桜前線北上はどこまで？ ここ鳥海山はやがてブナの若葉の峰上がり。雪形は「種蒔き爺さん」が現れる田植えの頃は、水鏡にその姿を映す時節です。私は生物多様性国家戦略・環境アセスメント法制定後、山岳環境保全に絡む希少猛禽類生体調査で山を楽しんでいます。集会・行事に参加できず申し訳ありません。会報「緑爽会」が届くのを楽しみにして待っています。
- 近藤 裕 まもなく93歳ですが、何とか元気でおります。昨年6月に東京税理士会会長から感謝状、12月に鳥取県大山町長から表彰状を授与されました。当日の盛会を祈念申し上げます。
- 近藤 緑 シルバーカーを必要とするようになって久しい私ですが、ケアマネさんの勧めで最近新車？に替えました。安全第一と改良されるたびに重くなって、バスに乗るにも苦勞します。リハビリセンターに行くと、私は元気組の一人。とにかく現状維持に努めています。事務局の皆様、いつもお世話様です。「山岳文化」を継承する会として、今後も仲よく続くよう、よろしくお願いい致します。
- 関塚 貞亨 3月25日に98歳になります。歩くのは1分間に50歩ほど、歩幅は20cm。ゆっくりと50m歩くとひと休みします。坂は20mごとに休み、階段は手すりがないと四つん這いにならないと登れません。幸い介護保険にはやっかいにならずに生活していますが、一人暮らしになって15年。1日の半分はベッドの中です。何とか出席して皆様に合うのが楽しみです。
- 吉田 理一 魚沼市(小出)の今冬の最深積雪は1月29日の188cmで例年より約3割少ない「やや少雪」であった。日増しに耕作地が顔を出している、昨秋約100個植えておいたチューリップの球根が相当数狸に食べられていた。対策としてネット通販でトラバサミを購入しようとしたら使用するには「捕獲許可証」が必要、ホームセンターで販売されている小動物捕獲檻は捕獲後の処理が？ 結局「害獣忌避剤」を散布して狸と共存

することにした。

- 里見 清子 2020年春からは電車にも乗らない。路線バスにも乗りませんが、早く各地に自由に出掛けたいと思います。弟妹とは日光等各地の日帰りの旅を楽しんでいます。河津桜を見たり、焼津のお魚センターに寄っても、山が遠くなりました。元気です。
- 渡部 温子 先約があり出席できませんが、体調は良くなりつつあります。一番弱ったのが脚力で、坂道は息苦しい状態です。会報ありがとうございます。他の同好会の方から誉められました。重ねて感謝とお礼申し上げます。
- 堀井 昌子 総会の準備ご苦労様です。当方、週4日仕事をしていますので、専ら車窓からの桜を楽しんでいます。
- 川嶋新太郎 体調悪く外出の様子を見ているところです。残念ですが欠席致します。皆様宜しくお願ひ申し上げます。
- 高辻 謙輔 車の免許がない私は昔からクロスバイクを愛用していました。近年、乗り降りする時、足をあげると股が痛み、年齢を自覚していたのですが、今春、気がついたら痛みがなくなっていました。あれは何だったのか。ささやかな近況です。会報、毎号楽しみにしています。
- 南川 金一 地元民も来ることのない谷で見つけたウドの大群落。根元にピッケルのブレードを打ち込んで背負いきれないほどに採った。北アルプスの飛騨側、森林の下でギョウジャニンニクの大群落。山登りの副産物である。目的の頂上に立つのが第1、良い写真を撮れるのが第2、第3が副産物。三拍子揃っての収穫に意気揚々と帰った山が何回かある。山登りが過去形になると、そんな思い出も懐かしい。
- 森 武昭 年相応の登山を楽しんでいます。かながわ山岳誌の出版に向けて精を出しています。来年1月完成の予定です。
- 鳥橋 祥子 コロナが少しおさまってきてほっとしております。ぼつぼつと近くの山歩き続けようと思います。
- 中條 昌子 これでお正月の準備もすべて終わったと足早に歩いていたとき、右足が工事中のようなグサグサのタイルに足を取られ、前に体がとび転倒。前歯がグラグラ、二の腕が(左手)ニヶ所骨折。主治医曰く「不幸中の幸は右手でないこと、粉碎骨折ではないこと。完全に治るのは半年、治らない人もいる」90%は治っていると思います。
- 大島 洋子 登りが辛くなりました。専ら散歩の毎日です。伐採が問題になっている神宮外苑にナンジャモンジャが何本かあります。4月には咲くでしょうか。楽しみです。
- 島田 稔 いつも大変お世話になり有難うございます。年齢と共に体力・脚力減退、動作緩慢、言語不明瞭、視力・聴力衰弱等々周囲に迷惑をかけ続ける昨今です。緑爽会の会合には出来るだけ参加致したいと思っておりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。
- 小清水敏昌 コロナがそろそろ終息しつつあります。これからは外に出て緑の山に行きたいと思っております。今後どうぞよろしくお願ひいたします。
- 長沢 洋 近況というほどのものではありませんが、冬の間は、茅ヶ岳山麓の展望のいい伐採地を探しに出かけたり、富士川左岸の低山を歩いておりました。ちょうど今、大泉の桜が満開で、去年より10日は早いです。(4月3日)
- 辻橋 明子 傘寿を過ぎてソロでの山行は身内がうるさいので唯一許されている高尾山を徘徊している今日この頃です。皆さまビスターリ歩きの個人山行にお誘い下さい！



- 間瀬 泉 今年も平地を歩く旅はしたいものです。どうかよろしくお願ひ申し上げます。
- 富澤 克禮 相変わらず、月 20 日位のペースで高尾山に登っています。最近、樹木にも関心をもち、沿道の樹木の名前を少しずつ覚えて楽しんでます。
- 先日、下山途中。幼樹の周囲を刈り払って手入れをしている高齢の女性に、その木がブナであることを教えてもらいました。「高尾山には、ブナの幼樹はなく、現在生えている樹齢 250~300 年のブナが、枯ればブナがなくなる」と聞いていたので驚きました。また、これを見守る楽しみが増えました。
- 竹中 彰 去年は我が古巣の一橋山岳部（嘗ての高商、商大時代から続く名称）が創部百周年を迎えて各種の行事が計画され略恙なく終了しました。本年は新たな世紀に向かって歩をスタートさせる年となりましたが、この数年のコロナ禍での活動の制約などから部員の考え方も大きく変化しており、嘗ての様なアルパイン一筋組は少数派となり、多くは日帰りハイキング派も多い。これらの多様なニーズに対応する組織に変貌してきていますが、OB 会・針葉樹会の一員として伝統の継承を頭の片隅に置きつつも、時代に即した彼らなりの活動を見守り続けたい。
- 自身の活動としては 80 歳を超えて登山活動の「より高く、より陰しく」は望むべくもなく、所属支部の「低山を楽しむ会」及び「山の唄を歌う会」を中心に据え「初心者向け登山教室」に講師・スタッフとして協力し、緑爽会の行事にも参加させて頂いて無理のない健康ウォーク、反省会などの場で懇親を深めていきたい。
- 夏原 寿一 「ギックリ腰 家の中でも 3 点確保」いやはや、参りました。お粗末！
- 瀬戸 英隆 体調に特に変化はなし。但し頭脳にやや異状あり、多分認知症。故に外出にとても気をつかう。山はこれに左右されず月に 1 回、低山を単独で歩いている。何卒よろしくお願ひします。出来ればご一緒願ひいたし。
- 田井 具世 コロナ禍の終息もなく不安定な時世が続く中でのお仕事はお疲れになられたことでしょう。何時もありがとうございます。久し振りの外出、総会出席致しますのでよろしくお願ひ致します。これを切っ掛けに外に目を向けて行動出来るようになることを願っております。
- 渡邊 貞信 皆様こんにちは。6 年半の間、会計幹事を務めてきましたがこの度幹事を退任させて頂きました。尚、今後は都合のいい時には出掛けて行くつもりです、宜しくお願ひ致します。最近急激に体力的に衰えて来て、皆様と対等のスピードでは歩けなくなって来ました。12 年間毎年出掛けた海外トレッキングも一休みが長くなりました。しかし山を愛する気持ちはいささかも変わりありません。
- 今後ともよろしくお願ひします。
- 深田森太郎 生憎当日所用があり、欠席させていただきます。ご盛会をお祈り致します。
- 石塚 嘉一 去年は、コロナ感染者が急増した時以外は、ほとんど毎月、東京多摩支部の「低山を楽しむ会」で日帰りの山行ができました。コースの下見をするので、同じコースを 2 回歩けます。支部の山岳古道調査で月に 1-2 回、調査山行に奥多摩などに行きます。さらに、緑爽会の山行があるので、低い山ばかりを 1 年間、隔週のように歩いていたこととなります。その上、昨年春から初冬まで、全国でチョウの種類と数を調べるモニタリング調査を、自宅近くの武蔵野公園、野川公園でも毎週続けました。今年の調査も 4 月から始まりました。おかげで、山歩きの楽しみも多様になりました。それで

も、昨年夏は北アルプスの宿や山小屋を予約したのに、コロナが急拡大して2回とも中止して残念でした。今年には行きたい山に行けるかどうか。

松川 征夫 4月8日は高尾の森づくりの会定例作業日で9日の植樹祭の準備をしなければいけません。申し訳ありませんが総会は欠席とさせていただきます。

荒井 正人 今年には桜のみならず花の開花が早い。あの時期にあの山であの花をと思っても、うまくタイミングが合わない。友人が桜見物ツアーに参加したが「蕾ツアーだった」とメールしてきたことがあった。それも困るが今年はその逆が多くなりそうです。

小原 茂延 埼玉支部の総会と重なったため欠席させていただきます。昨年4月から支部に同好会「彩の山研究会」をつくり、山岳文化について同好の士と語らう活動を始めました。山の文化に関するものなら何でも、登山史・文芸・自然科学など多岐に亘り、会報『秩父嶺』を発行しています。月1回の「山談会」は平日の日中に集まり、参加者相互が話題提供しています。

小林 敏博 昨年、夏に入る前につまらないことで右上腕部を骨折してしまい、何ヶ月も山歩きを控えていました。そのせいで体力も落ちてしまいましたので、年末前後から東京近郊の低山で足慣らしを始めて数ヶ月。春の盛りの頃にはもう少し高みの山へ向かおうと考えています。初めての骨折ですが、それにしても骨は簡単に折れるものだと改めて反省しました。

栗城 幸二 年末に西山にご一緒していただきありがとうございました。実は、その直後にヒザをまた痛めてしまって、2か月間全く山には行けませんでした。1月は安静期間、2月からリハビリ開始し、今月に入ってからやっと近辺の低山で足慣らしを開始したところです。今月(3月)末からは北海道の山の予定ですが、雪(クッション)の上です。何とかなるかと思いき行かなくなりました。今は久々にスノーシュー等を出して雪山道具を整理しているところです。

## 新年度に当たって

緑爽会代表 荒井 正人

昨年度は、総会を書面審議としたものの、その後の行事は、コロナの間隙を縫い、怪しい天気のものともせず？すべてが実施できました。暑気払い、忘年会も、初めての試みとして中華料理店で行いましたし、講演会も2回開催できました。まずまずの一年だったと総括できますが、個々の運営面などを振り返ると、まだまだ至らぬ点もあったと反省しきりです。

今年度は、コロナの状況が沈静化の様相を呈していますが、これも何とも言えません。ルームの使用制限は取払われましたが、飲食は出来ません。そうした状況下では、今年も工夫を求められると思います。この点は幹事団のコミュニケーションを良くし、皆様のご意見をお聞きしながら、皆様に楽しんでいただける行事を行っていきたくと思います。それが新入会員に繋がることを期待しています。

昨年のアンケートに基づき、今号から会報の送付方法を改めますが、年度初めでもあり、会報をメール添付でお送りする会員にも「名簿」と「しおり」は郵送することといたしました。また、新年度に当たってのお願い、お知らせを1枚モノにまとめましたので、お読みいただきたく思います。

30周年に向けてのスタートでもあります。皆さまのお知恵もお借りしたく、ご協力とご意見をよろしくお願いたします。

## 3月山行 鐘撞堂山

横関 邦子

実施日：2023年3月15日(水)、参加者：12名(写真参照)

埼玉県寄居町にある<sup>かねつきどうやま</sup>鐘撞堂山への山行を実施した。晴天青空の下、暑くもなく、寒くもなく、そして風もほとんどなく、山歩きには最高の天候で、参加者は12名。いつもは中央線沿線など集まり易い場所の方が多かったようだが、鐘撞堂山は集合場所の秩父鉄道「桜沢」駅まで東武東上線、八高線などとアクセスが悪く時間がかかったのではと思う。

とは言いながら時間通り10時に「桜沢」駅に全員集まり出発。周りを見ると高い山があるわけではなく、まだ冬枯れの木々に覆われた小高い山が連なって見える。駅から10～15分程度で登山口に到着し、入口にある八幡神社で今日の安全な登山を祈願した。

この八幡神社は横に回ると八幡造りと呼ばれる様式の建物であることが見える。後殿に軒を接して前殿を作り、合いの間で連結している典型的な様式のもの。小林さんからの実物を見ながらの説明を興味深く伺った。能舞台を持つ立派な神社である。

この八幡神社のちょうど後ろに登山口があり、とっつきから10～15分程度の急登。駅から見た小高い山とは、ちょっとイメージの違う登りだが、登りきると雑木林の木々の間から陽光がこぼれ、寄居の町が見える。歩き始めて20分くらいで八幡山の頂上(210m)に到着。ここまでで足慣らしと呼吸を整え、鐘撞堂山への山行が始まる。

頂上までは、登り一降り一平らな屋根歩きが繰り返す2時間弱のコースである。登り切ったところには、それぞれ②、③、④……と番号のついた掲示があり、ちょうど2合目、3合目、4合目…といった感覚である。②のところでは、山のふもとの家々の庭にコブシやモクレンの白い花が木一杯に満開となっているのが見える。③のところでは、鶯の声に聞きほれていると、カラスが「カーカー」と鳴き、まだ街と山が混在した感じ。上に登るにつれて、山ツツジの出始めた新芽が、新緑の柔らかい色を見せていた。日の良く当たる場所では、赤い花がちらほらと咲いていた。

ウグイスカグラのピンクの小さい花が満開の木もあり、たくさんの春の気配を感じることができた。⑥のところあたりから、思いもかけずカタクリの花が咲いていた。

八幡山にはカタクリが自生する場所があり、「あっココに、もうカタクリが咲いている」とみんな一斉にカメラやスマホを傾けたが、上に行くにつれ、ここにも、あそこにもと、カタクリらしく花びらをくるっと上に向けている花を選んでシャッターを押すなど、かわいらしいピンクの花に感嘆し、夢中となった。地域の人が保護しているらしく、まだまだ葉だけしか見えないカタクリも多数自生している。もう少したてばもっとたくさんカタクリが咲くのだろうと思う。サンシュユや早咲きの桜も、黄色やピンクの花で楽しませてくれた。



頂上近くには、階段があり、最後に130m(手元のGPSで推定)ほどを一気に登る。4つの階段があるがすべてにまき道があり、階段を避けることもできる。お昼になり、エネルギーも切れそうな12時15分に頂上についた。鐘撞堂山の330.2mの山頂からは、秩父の山並み、関東平野がよく見渡せる。頂上には東屋、展望台が整備されていて、東屋の中でみんなと昼食。途中から頂上まで一緒に登った多分地元のおじさんが、自分の畑で採ったジャガイモを茹でて持ってきていて、頂上で食事



している人たちに振舞ってくれた。茹でただけのジャガイモだが、自分の畑で掘ったという新じゃがはとてもおいしかった。石塚さんがリュックに入れて運んでくれたドイツ製のグリューワインも、疲れを飛ばしてくれた。

幹事役として下見に来た時は日曜だったので、大勢の地元の人がこの鐘撞堂山に来ており、前に来た時に桜の花が咲きかけていたので、今日また見に来たんですとか、登りのきつい箇所にはまき道があるよと教えてくれ、大勢の人が大事にしている山という感じがした。余分な枝は切り取るなど、手の入れられた里山という、やさしいイメージで、私たちの心を休ませてくれる山である。

鐘撞堂山という名前は中世戦国時代、北条氏支配のころ、鐘を置き危急の役に立てたことに由来するとかで、その名の通り鐘もあり、つく事ができる。

昼食後、12時45分頃、頂上にあるこの釣り鐘の前で集合写真を撮り、山を下った。今回は鐘撞堂山の東側から登り、西側を下り秩父鉄道「<sup>はぐれ</sup>波久礼」駅までのコースで、はじめは階段のある急坂をおり、しばらく山のふもとの平の道を進む。円良田湖近くの分かれ道で、少林寺方面に登り進むと途中ピンクのバラのような八重の椿と、茶花に使いそうな真っ赤な一重の椿がきれいに咲いていた。



左手前 松川征夫、その後ろから右へ、大島洋子、荒井正人、島田稔、横関邦子、辻橋明子、富澤克禮、栗城幸二、小林敏博、藤下美穂子、石塚嘉一、鳥橋祥子

少林寺までの入口の羅漢山山頂の釈迦三尊像を拝み、そこから少林寺までの下りの道に入った。ここには五百羅漢の石仏が道に沿って並んでいる。関東では川越の喜多院、目黒の五百羅漢寺と並ぶ五百羅漢の名所なっているとか。顔の表情、ポーズは様々で、足元を気にしながら、お酒の徳利を持って嬉しそうでだれかみたいとか、「見ざる言わざる聞かざる」と同じように三体の羅漢様が揃っていると話しながら歩く。見ているだけで心が和む。五百羅漢が終わったところが少林寺(曹洞宗)である。山歩きはここで終わり。



ここからは、住宅街を通り、波久礼の駅まで30分ほど歩く。波久礼の駅には14時45分に到着。15時25分の熊谷行きの電車に乗り、一駅隣の「寄居」まで。東上線に乗り換え、「小川」で途中下車した反省会では、埼玉のうどんや小川の地酒で骨休めをし、解散した。お疲れ様でした。

藤下と横関は、緑爽会での初めての山行リーダーでした。何事もなく無事に山行できたこと、皆様に感謝しています。ありがとうございました。

## 鐘撞堂山を登る

島田 稔

春まだ浅い3月15日、秩父鉄道桜沢駅のブリッジに集合、参加者12名である。目的は寄居の北側の鐘撞堂山(329m)である。戦国時代北条氏の出城で、荒川対岸の鉢形城の見張所として敵方の情報を鐘を撞いて知らせたという。

十字路を左折して八高線の踏み切りと254号線を横切って八幡神社の境内へ、その右裏から登山道に入る。爽やかに晴れ上がった空の下、雑木林の中は露岩まじりの急登も続いて八幡山(210m)に着く。更に十二社神社分岐を過ぎて雑木林の尾根道にカタクリの群生地があって思わず歓声があがる。保護地域になっているらしく深谷市の標識もある。尾根道は緩い上り下りが続いて鐘撞堂山のピークが見える。山頂の手前の左側斜面に満開のサンシュユが数株、実に見事である。最後の階段を登りきるといよいよ山頂である。四阿、展望台、小さな釣鐘もあり、先客も多く大変賑やかだ。南側斜面にはカワヅザクラが満開を過ぎてもなかなか素晴らしい。低山ながら奥武蔵や上州の山々は勿論、両神山、榛名山なども見られる楽しい山である。

下りはやや急な急坂が続き慎重に進む。円良田湖への林道を横切り羅漢山、少林寺への登山口に入る。笹の中を木段がかなり長く続き漸く羅漢山(247m)、見晴らしはないが釈迦三尊を祀る静かな山頂である。少林寺への道には草むらに埋もれた数多くの羅漢が並ぶ。実に様々な表情をみせ、倒れかかった像、胴だけになった像などひっそりと佇んでいる。自分に似た像が必ずあるといわれるが、果たしてどの像であろうか。下りきったところが少林寺で戦国時代(1511)に創建された古刹という。



波久礼駅までは住宅地の中の長い道のりで、秩父鉄道の線路と国道140号線を目印に淡々と歩き、14時30分頃駅に到着した。

お疲れ様でした。好天に恵まれ穏やかな春の一日をのんびりと歩くことが出来て本当に楽しい山行でした。幹事の横関さん、藤下さん、老翁を励まして下さったメンバーの皆さん、大変お世話になり、有難うございました。

(写真撮影：石塚嘉一)

## 2月例会：芳賀さんのお話を聞く会

### 「1957年 入会した頃の日本山岳会のこと

実施日：2月24日（金） 14時～ 場 所：飯田橋東口貸会議室

参加者：緑爽会会員26名 その他日本山岳会会員3名

芳賀さんに英国山岳会などについて語っていただこうと、かなり前から夏原さんが構想を描いておられましたが、タイミングが合わないうちにコロナ禍となってしまい、実現できずにいました。昨年末頃、交通会館での「山好きの山の絵展」が2月に開催されるとのことで、その折にどうかと思ってご相談すると、奥様の出品に合わせて東京に来られるとのことでしたので、ぜひこの機会にと考え、開催に至ったものです。以下、芳賀孝郎会員のお話の主なところを記します。

冒頭、芳賀さんから「私の様な“化石の人”」の話をお聞きにきていただきありがとうございます。実は50数年ほど前に松方三郎さん（以降、松方さん）がある席で、「最近、日本山岳会も化石のような人間が多くなってきた、その化石がモノを言うから困る」と話されていました。その頃の化石とは70～80歳位のことだったと思いますが、今は人生百年時代だから90歳以上でしょう。私は来年90歳になりますが、そんな準化石の話を沢山の方に聞きに来ていただきお礼申し上げます」と話されて会場は笑いに包まれた。



入会は1957年だが、その前年、マナスル登頂の後に加藤泰安先輩（以降、泰安さん）とお茶ノ水にあったルームへ行ったことがある。その時はちょうどマナスル登頂の記録映画の題名を何とするかの議論が行われていた。映画会社の関係者はタイトルにパンチの効いたものを付けて話題にしたいという思いだったので「マナスル征服」だとか「日本人による8000m初登頂」といった勇ましい題名が出されていたが、その場で榎有恒さん（以降、榎さん）が「私たちはマナスルに立たせていただいた。『マナスルに立つ』として欲しい」と話された。私は凄い人だなあと思った。この題名が決まる経緯は隊員たちにもあまり知られていないので、後に会報「山」書いた。

（編者注：「山」1997年7月号NO.626）

考えてみると、1925年に、日本山岳会初の海外遠征マウント・アルバータに初登頂した時にも、榎さんは“山頂での万歳は慎みなさい” “国旗を掲げることもやめなさい”と仰っていて、山頂では固い握手で涙したということだ。この時からの榎さんのお考えなのだなと思った。

泰安さんには日本山岳会の関係であちこちに連れて行ってもらった。泰安さんは四国、<sup>おおす</sup>大洲藩の殿様、加藤子爵の家系で、私は小姓にしてもらったおかげで、いろいろとお世話になった。

ルームに行った時に、デッキチェアでパイプをくゆらせている人がいた。あの方は浦松佐美太郎氏ではないですかと尋ねると、「何でお前は浦松佐美太郎を知っているのだ？」と問われたので『「サウス・コル」を訳された素晴らしい方です」と答えたら、「あのような方はサロン登山家というの

だ」と話された。そこへ泰安さんの先輩である松方さんが通りかかって「今、サロン登山家がどうのと学生に行ってなかったか？」と問いかけられた。泰安さんはちょっと慌て気味で「特に話しておりませんが」と答えたが、松方さんは「きちっとサロン登山家を説明しなくてはいけない。お前は本当に成長しないなあ」と言って、続けて「神田の古本屋で学習院の資料を買ったら、高等科の成績表が出ていた。今度山岳会の集会でそれを発表してやる」と話されたので泰安さんは「それだけのご勘弁を！」と頭を下げた。その時に松方さんは「お前はジョン・ラスキンを知っているだろう。学生にそういうことを話してやらなくては」とも仰った。

その後、私が「ジョン・ラスキンとはどういう人ですか？」と尋ねたら、泰安さんの態度が急に変わって「お前はラスキンも知らんのか。ラスキンを知らない者は日本山岳会に入る資格がない。勉強して出直して来い」と言われた。「2週間後に調べて報告しろ。ヒントをやる」と言って質問が続き、「夏目漱石の本は読んだか」、「『坊ちゃん』は読んだか」、「そこに“ターナーの松”が出てくるだろう、わかるか」というので「ターナーとは英国の画家のターナーですか。それは知っていますが・・・」と言うと、「お前は本の読み方が悪い」と、今度は本の読み方の説教になった。

その後「松方さんが泰安先輩を叱った理由がわかりました」と調べたことを答えた。ラスキンはターナーの風景画を評価し、山岳美を世に伝えた。自分は山には登らないが、登山の普及に貢献したということで英国山岳会に推挙されたこと。日本でも志賀重昂が同様の理由で日本山岳会に推薦されたこと。すると「生意気なことを言うな」と一蹴された。（編者注：この部分、一部芳賀さんの書かれたことを参考にさせていただいています。）

ある時、泰安さんから「井上靖と銀座のバーで会うが来るか？」と誘われ、学生服ではまずいからと背広を借りて行った。いろいろ話す中で、井上靖が泰安さんと、こんなやりとりをした。「加藤さんは家族はお持ちですか？」「はい、女房とこどもが二人です」「奥さんと山と、どちらが大事ですか？」「そりゃあ、もちろん山を大事にしています。女房とは15年ですが、山は30年の付き合い。私は長い付き合いを大切にしています」。

井上靖の『明日来る人』という小説は、泰安さんがモデルだということだ。さらに「加藤さん、あなたにとって山とはどんなものですか？」と尋ねると「私にとって山登りはホビーではなく、ライフです」と答えていた。本当に山に対して真剣なんですね。

井上靖といえば、『氷壁』繋がり、石原国利さんから電話があつて、三島文学館で講演をしてくれないかという依頼を受けたことがありました。



会場の様子

その当時は学生部というのがあって、山岳会とはなんぞやという講演があつた。槇さんが講師の時に、「アルパイン・クラブのクラブとは？」という話になり、「芳賀、君は加藤泰安と銀座のクラブに行ったそうだな」と言われた。伝わっているんですね。槇さんの話は「山岳会では、先輩は若い会員を歓迎し個性を伸ばす、新人は先輩に敬意を払う。クラブでは会員はイコールである」というものだった。後に副会長時代に講演をすることがあつたが、このイコールの話、それでクラブライフが楽しくなり、その中から新しいものが生まれる、と話をしてきたが喜ばれた。

話は変わって、1957年という、英国山岳会の創設100周年の年。この記念式典に日本からは槇



さんと松方さんが招待された。(芳賀さんは、その時のことを報告する松方さんの話を聞く機会に恵まれたので、エピソードをいくつか話していただいた。)英国山岳会の当時の会長は1953年のエベレスト隊の隊長ジョン・ハントで、遠く日本からの二人を歓迎してくれた。シェルパのテンジンも招待されていた。松方さんがこの時に会った人で印象に残ったのは、トム・ロングスタッフに会ったこと。またマウント・アルバータをガイドブックで世界で紹介したソーリントンにも会ったこと。さらにアルバータの第二登頂者、アメリカ山岳会会長オーバーリンに初めて会ったことなどだった。



(編者注) トム・ロングスタッフ：当時 82 歳。『わが山の生涯』(望月達夫訳)の著者で、英国山岳会入会の紹介者の一人はウエストン。ナンダコートの 6000m 以上まで登り、ナンダデヴィの偵察もしている。何かと日本と縁の深い登山家。

100 周年と言えば、私は日本山岳会の 100 周年の時に、娘が病気になり会議に行けなかったが、その間に募金委員長になってしまい大変だった。それでも読売新聞社の内山社長は小・中・高の同期生とわかり、50 年ぶりに会ったことで協力してくれた。

(ずっとここまで立ってお話いただき、ちょっと休憩したが、その時に代表から今日の打合せをした時に「これからニセコにスキーに行く」ということでビックリした話をしたことで、その話から続けられた。)

ニセコに行ったら、滑っているときには気づかなかったが、レストランには日本人がいない。シールを付けて登って行くと追い抜かれるが皆外国人で、スイス、フランス・・・なぜかと言うと、向こうでは2週間に一度くらいしか降らず、標高があるから溶けずにスキーは出来るが、ニセコでは毎日新雪を滑ることが出来る、ということだった。しかし今後の開発等先行きが懸念される。今日のスイス・アルプスが世界的な山岳観光地となっているが、英国山岳会無くしては成り立たなかった。そして先々を見据えた観光地として守られている。ニセコにしてもどう将来に世界的なリゾートにしていくか考えないといけない。

そういう点では、英国山岳会 150 周年には日本から中村保さんが招待されたが、そうした国際的に通用する人材を育てていくことも大事だ。

何人かの方からご質問がありました。神崎会員から「第一次マナスル隊で頂上まであと 300m だった時の三田さんの心情は？」との質問があり、芳賀さんからは「三田さんは命令しない隊長だった。帰国した時に新聞記者が“残念だった”との言葉を期待していたが“楽しい登山だった”と言った。これは三田さんの人柄だと思う」と話があり、神崎会員も納得の表情に。

今回の講演会は、ルームの人数制限があって使えず、やむなく、なるべく市ヶ谷に近い所だと飯田橋東口から近い会場を借りました。ただこうした会場は、設備の良しあし(空調やマイク等)、使用の制限や注意事項もあり、使い勝手が良くないと感じました。写真撮影も考えておらず、運営面など至らぬ点があったかと思えます。この経験を次に活かしていきたいと思えます。

欧米の山岳会についてもお話いただきましたが、これは別途、今後何らかの形で皆さんにご紹介したいと思います。

(報告：荒井正人、写真撮影：石塚嘉一)



宮家の御姫様と結婚した例もある。山岳会は優秀な人材を一人失うことになったわけで、残念な出来事であったと思っている。

それから数年、お子さんが巣立って夫婦だけになって家を整理し有料の老人ホームに入居して間もなく脳血栓を起こして廊下で転倒し、電話機台に激突して亡くなられた。まさに「禍福は…」の諺を思わせる一生だった。(中村純二さんが『山岳』2010年Vol.105に書かれた、松丸さんの追悼文をぜひ読んでいただきたい)

### ◎渡辺 正臣 (1918年～1996年)

緑爽会の設立を指導し名付け親である。そして北は北海道から東北、関東、伊豆箱根、富士山とその周辺、中部山岳、近畿など日本の山のガイドブックを「山と溪谷社」、ブルーガイドの「実業之日本社」から発刊、1988年には累計500万部に達して山岳会近くの会館で盛大なパーティーが開かれた。まさにガイドブックの王様である。新ハイキングの前身、戦前のハイキングクラブを主宰し、会員で旧国鉄の新潟鉄道局長だった山菜の権威・片岡博さんの協力を得て、戦前に会員と国鉄職員による本州分水嶺の完登をなし遂げたことはあまり知られていない。

渡辺さんはガイドブックを発刊するだけでなく、八丁堀に個人事務所を借り、毎週月曜から金曜まで桜新町の自宅から午前9時から5時まで出勤、もちろん給料なしの山岳案内事務所を開設している。ガイドブックにも事務所開設と電話番号を明記、疑問に答えることを記載している。

日本山岳会自然保護委員長時代に、登山における行動指針として「フィールド・マナーノート」を刊行した功績を知っている人も少なくなった。

山岳会創立80周年を祝って椿山荘で記念晩餐会を開いたとき、渡辺さんが永年にわたって撮り続けたスライドを当時の大塚博美副会長と新井陽一郎常務理事がセレクト、会場の大きなスクリーンに一時間にわたって映し出されて出席者を堪能させたことを覚えている。

渡辺さんが亡くなった時、ときの資料委員会の担当理事だった山口俊輔さんが「金は出せませんがスライドを山岳会に寄贈して下さい」と申し入れたが、遺族は3万円で購入を申し入れた個人に売り払ってしまった。安すぎる。もったいないことをしてしまったと今でも残念に思っている。

緑爽会発足の経緯は、藤平正夫会長の時。委員会に定年制が設けられ自然保護委員会も古い会員はやめることになり、OB会を作って、渡辺さんが名付け親となって同好会「緑爽会」が発足した。

渡辺さんの山岳会入会は1945年で戦争末期であったが、事務局の塚本さんの勧めでハイキングクラブの団体名で加入、1962年10月ハイキングクラブ解散に伴って個人名加入となった。亡くなる一年前には実質50年になり永年会員になれる資格が備わったが、規則に厳格な役員の反対で永年会員になれなかったのは残念なことであった。



## 山岳会設立の頃〈20世紀初頭の東京〉②

### 山岳会発祥の場所・富士見楼

南川 金一

山岳会は1905（明治38）年10月14日、7人が集まって会設立に関する打ち合わせを行って発足した。その日が山岳会設立の日であり、その7人が設立の発起人である。場所は現在の飯田橋駅東口の水道橋駅寄り、中央・総武線の線路と神田川の間、飯田河岸と呼ばれていた所にあった富士見楼である（前号添付の地図の②）。『新撰東京名所図会』（『風俗画報』の増刊として明治39年刊行）の麹町区之部に富士見楼が載っている。

「富士見楼は飯田河岸にあり。層楼堤に面し、神田川に背す。日本料理店にして、明治二十年の開業なり。客間は十八室あり、室内の装飾つぶさに趣きあり。砲兵工廠の赤煉瓦、堤上を走る甲武鉄道の汽車は、楼にとりて没趣味なるも、楼上遠く富峯を望むるに至りては甚だ爽快なり。中庭の一隅の井戸、深さ六十間、清水を噴出し、池に充し、その水、浴瀑場に落つ。楼の裏手、神田川に臨みて浴瀑場あり。藤棚を架し、巖壁高き處、懸泉麗々として降る。その水清冷にして、夏日の游浴に適す。浴後浅酌一番、妓を聘し、管弦の声、彩燈の火影、水に映じて流れ、料理はともなれ、官吏紳士の来り遊ぶもの小酌高宴、親睦を結ぶもの多し」とある。「層楼」というのは当時としては珍しい3階建てだった。「堤」とは甲武鉄道の線路が高架上にあったことを示している。「砲兵工廠の赤煉瓦」とは、神田川の対岸、現在の文京区側の一帯は東京ドームのあたりまで砲兵工廠で、煉瓦の大きな建物と周囲に煉瓦塀があった。山岳会設立の打ち合わせに集まった7人のうち、最年長の城数馬は弁護士で東京市議、小島烏水は銀行員、高頭仁兵衛は大地主の旦那であったから「官吏紳士」の範疇であろうが、他の4人は二十歳前後の若者という珍しい取り合わせだった。夕方からの集まりだったが、「妓を聘し、管弦の声」という場ではなかつたろう。

武田久吉は「明治38年10月14日、（博物学同志会の）第13回の小集会をやったので、…それが済んでから、甲武鉄道の飯田町の停車場に近い飯田河岸に三階建ての料亭…富士見楼という名でした。その楼上へ7人集まって最後の相談をして…山岳会が結成された」（『山岳』第61年「山岳会創立前後」＝創立60周年記念講演の記録）と明確に語っている。ところが、他の6人は誰もこの集まりのことを語っていない。記憶から消えてしまっているのである。山岳会がいつ発足したのか。会がいつまで続くのかも知れない当初の頃は、そんなことは話題にもならなかつたが、20年、30年も経つと、そのような疑問が出てきて、小島烏水ですら、会の発足は明治39年4月、すなわち『山岳』第一年第一号が出た時（そこには「山岳会設立の主旨書」が載っている）としていた。

博物学同志会の会誌『博物之友』によると、小集会は稚松（わかまつ）小学校（前号添付の地図⑤）を会場に、2時から4時までが恒例となっている。前掲『東京名所図会』麹町区之部に稚松尋常高等小学校が載っていて、「飯田町4丁目1番地に在り。明治6年、当校長梅沢親行氏の父の創立。…目下460余名の生徒を養成せり」とあって、かなり大きな私立の小学校であった。梅沢親行とは山岳会設立発起人の一人・梅沢親光の父親である。梅沢親光は博物学同志会の中心メンバーであり、彼が集会の会場を設営したのだった。山岳会の発起人メンバーで明治38年10月14日の同志会の小集会に出席したのは河田、高野、武田、梅沢の4人で、他の3人は富士見楼に直行している。

私は当初、山岳会設立を相談する会場に富士見楼を設営したのは武田久吉だろうと考えていた。しかし、梅沢親光の父親はこの界隈に広い人脈があり、梅沢親光もこの地域に明るく、来客の接待で父親が富士見楼を利用する機会が多かつたのかも知れないと考えるようになった。

## 人は何処かで繋がっている

夏原 寿一

会報 No. 183 に、吉田理一さん投稿の『全国山の日協議会～通信員レポート』が掲載されている。その文末に「…人の縁とは不思議なもの…」とあるが、私も同様、思わぬところに人との繋がりがあることを常々感じている。そこで「繋がっている」ことの分かった緑爽会会員の方々と、繋がりの分かった経緯などを紹介させていただいた。因みに、私が JAC に入会したのは 2005 年 12 月（創立 100 周年の年）、緑爽会に入ったのは 2007 年 1 月。



### ◆山本良子さん

私は入会資格 55 歳以上という会に入っている。その会は、ある大企業の OB 達が会社の支援を受けて作ったものだが、その後、会員が友人を誘うなどして、OB でなくても入会している。会の行事は、会員の趣味や特技を生かしたものをメインに、例えば、鎌倉に詳しい人が鎌倉を案内するとか、音大出の人がカラオケの歌い方を指導する、たまにはホテルのレストランや銀座の寿司屋で贅沢をするなどなど多彩だ。そんな会に山とスキーに長けたご夫妻の会員が歩くスキーを主宰していたので、私は家内共々、毎年のように参加していた。私が JAC に入る前のことだ。

さて、JAC に入会して初めて出席した晩餐会。当時、晩餐会には支部や同好会が屋台のようなブースを出して、出版物やグッズの販売、会員の勧誘などをしていた。それらのブースを覗くのが入会して間もない私にとっては全てが新鮮だったし、お祭りのようで楽しかった。ブースを覗きながら歩いていると「山げらの会」のブースに、あの歩くスキーのご夫妻の奥様・山本良子さんがおられるのではないかと。山本さんご夫妻が JAC の会員だったとは知らなかった。思わぬ出会いだった。

2008 年の晩餐会で配付された資料を見ると、「新永年会員」のページに良子さんのお名前があり、「物故会員」のページにご主人・兼太郎さんのお名前がある。こんなことってあるのだろうかと思う。スキーの宿で、夕食の後に歓談しているときの兼太郎さんの穏やかな口調が思い出される。

### ◆田村佐喜子さん

緑爽会の行事「歴史と文学の街 千葉県市川市散策」に参加した。会報 No. 129 に掲載されているその報告記事に「…東に折れて少し行くと真間小学校。なんとその昔、田村さんはこの小学校に軍人だった父親に面会に来たことがあると大感激」とある。大感激の田村さんは、当時のことを沢山話してくださったのだが、その中に、私が幼少期を過ごした東京の下町の地名が次から次へと出てくるので、松本の方が何故？ と不思議だった。

そこで私が「私の生まれは日本橋の堀留、今の日比谷線の小伝馬町駅の近くで、物心のついたころには両国に引っ越していた。幼稚園は菊川幼稚園で…」と、そこまで話すと田村さんは「私は、その幼稚園の前の大通りの向かい側に住んでいたんですよ」と。エ～ッ！？ 生まれも育ちも信州だと思っていた田村さんは東京の下町の出で、しかも私が通っていた幼稚園の前にお住まいだったとは！

そして、こんなことも。当時、私の家の近くに都電の車庫があった。何かの記念の行事とか大きなお祭りのときなど、車体一杯に飾りをつけた花電車が出て行くので、よく見に行ったものだ。その話を田村さんにすると「私もよく行ってましたよ。そこで会っていたかもしれませんね」と。遠い遠い昔の地元が話題に！

#### ◆吉田理一さん

JAC に入って間もないころに出席した晩餐会。新潟在住の友達が来ているかなと思って、開宴前に越後支部のブースに行ったが見えないので、そこにおられたハッピー姿の方に声を掛けた。すると、その方は私の名札を見るなり「ああ、あなたが夏原さんですか」と言うではないか。初対面の方にそう言われて二の句の継げないでいる私に、「お友達があなたのことをよく話していますよ。写真がお好きなんだそうですね。スキーのときもカメラをザックに入れて滑っているとか」と。世の中、こんなことってあるんだ！

さて、2011年4月の緑爽会の行事「多摩川土手のお花見と旧西堀邸訪問と懇談会」に参加すると、そこに晩餐会でお目に掛かったあのハッピー姿の方がいらした。その方は吉田理一さんだった。しかも、吉田さんは緑爽会の会員だったのだ。これにはまたまたビックリ！

昨年(2010年)の3月、吉田さんから一通のメールが届いた。宛先は《緑爽会役員各位》で、件名は《緑爽会報 178号 想定外の反響》とある。そこには想定外の反響が幾つか書かれているが、その中に「繋がり」というキーワードで私も登場しているので転載させていただいた。

ここ2年程会報に投稿記事を載せていただいています。緑爽会会員に一番関心の薄いと思っていた「枝折峠 氷雪小屋」(会報 No. 173)の鉄塔の写真、夏原さんが電気工学の専門家で関心を持たれたとの事、何処で人と人が繋がっているか分からんものですね。

#### ◆山川陽一さん

私が以前住んでいた武蔵野市に1959年に発足したスキークラブがある。そのクラブは、市が主催していた市民のためのスキー講習会に毎年参加していた人たちが意気投合して作ったもので、1981年に「社会教育優良スポーツ団体」として文部大臣賞を受賞したことが自慢だ。現在の会員数は約70名。私は発足直後に入会したのもう60年あまりになる。

さて、スキークラブが発足30周年を迎えた年に記念誌を作った。10年ほど前、久しぶりにその記念誌を開いていると、「武蔵野市スキー連盟」に加盟している7団体の代表からの祝辞が掲載されていて、ある職域団体の代表に「山川陽一」とある。山川さんの現役時代の職場が武蔵野市にあることを聞いていた私は、山川さんに記念誌を見てもらいながら「これ、山川さん？」と訊くと「そうだ」という。そんなわけで当時、連盟の行事で山川さんと会っていたかもしれない！？

#### ◆梅本知榮子さん(元・緑爽会会員)

会報 No. 179の「近況報告」に、元・緑爽会会員である梅本知榮子さんの写真展を見に行ったことを書いたが、そこに登場している梅本さんと、私の友人である広告写真家、そして私の3人に繋がりのあることが分かった経緯を紹介しよう。

私が友人を誘ってアルパインフォトクラブの写真展に出向いたとき、会場の受付に梅本さんがいらした。梅本さんは私の友人を見るなり「あれ、Nさん、どうしてここに？」と。すると彼も「梅ちゃんこそ、どうしてここに？」。突然のことに、私は俄かには状況が掴めなかった。訊くと、ご両人は同じ山岳会の仲間だという。本当に偶然だった。ここでの出会いがなければ、私たち3人の繋がりには永久に分からなかつたろう。10年ほど前の出来事だ。



■こうして「繋がり」を書いていると、人間、後ろ指を指されるようなことをしてはいけないなと心底思う。心したいものだ。



## 雑誌『山の本』の休刊

南川 金一

白山書房から出版されてきた季刊雑誌『山の本』が、No.123、2023年春号で休刊となった。山の紀行文や研究の発表の場として貴重だっただけに残念である。1992年創刊、年4回の発行で31年間続いてきた。その間には、私も「知られざる山」をテーマに40回、10年間にわたり連載したほか、何回か投稿したから、多くの思い出を持つ雑誌である。白山書房の編集事務所は高尾山麓にあるので、原稿を届けがてら、高尾山の周辺や、その隣の相模湖・藤野辺りの山を歩いてから帰ったことも何度かある。この十年ほどは、若い頃のように集中力が続かないので、毎月の連載ではつらい。その点、連載の間隔が三ヶ月というのは、ほどよい時の間であった。

2017年に、『山の本』誌齢100号の記念祝賀会があった。その時集まった顔ぶれは、200号まで山登りを続けることはおろか、生きていくことすら難しいと思われたから、「200号の祝賀会が楽しみだ」などと言い出す者はいなかったと記憶する。休刊は寂しいが、30年余の長い間を楽しませてくれたことに感謝したい。

『山の本』最終号巻末の「編集日記」には、「コロナが流行してから売上げ部数が減少し…」とある。経費を回収できるほどに発行部数を確保できないことに加えて、ロシアのウクライナ侵略に端を発した物価高騰の影響が用紙等製作コストに及んできたという事情もあるに違いない。新聞であれ、雑誌であれ、単行本であれ、出版物はそれを販売することによって製作コストを回収する。製作コストには、原稿料、編集費、印刷・製本費といった直接的な費用に加えて人件費、事務所費といったものまでも含む。販売部数が想定した部数を上回れば利益になるが、想定部数に達しなければ、製作コストを回収できなくなり、赤字である。新聞代が値上げになり、文庫本でも千円の時代だという。この春には、『週刊朝日』でさえもが休刊になるとのニュースに驚いた。

出版不況と言われるようになって久しい。街中にあつたと記憶する書店が見えなくなった。日刊紙でさえも部数減少に苦しんでいる。何十年も続いてきたマラソン大会の看板が変わったのもその影響であろう。新聞社ごとに系列化していた取次店が一紙だけの取次ぎでは経営が難しくなり、複数紙を扱うようになった。そのため、購読していない新聞を間違えて入れてしまい、配達員が慌ててドアホンを押して、謝罪かたがた回収に来たこともある。

活版時代を経験した者からすると、最近の編集は随分と楽になった。パソコンでの原稿作りは、推敲や行数計算の容易なのは何よりである。編集ソフトを使って本を作ることができる。本作りの最後の段階である印刷と製本を専門の業者に頼めば、立派な本が出来上がり、趣味の世界ならば、それで目的は十分に達せられる。しかし、商売となれば、それを買ってもらわなければならない。商業誌編集者のつらいところは買ってもらうことにある。

私が『山岳』の編集に長くかかわったことは以前にも書いた。それは、もとより重たい課題であった。しかし、『山岳』編集がつらいといっても、商業誌編集者の、売ることにかかわるつらい苦労はなかった。そこが、機関誌編集者と商業誌編集者の重荷の大きな違いだと、私は考えてきた。

編集に携わる者は、編集者としての独立を考えるものである。出版社の立ち上げである。私がそれを考えなかったのは、給料日が近づくと、給料を払う算段に苦労する零細出版社の社長の姿を見てきたからである。そのような苦労はしたくないので、給料は安くても、気楽に山へ行ける身分でありたいと考えた。それだけに、『山の本』の発行を企てた人の勇気を、畏敬の思いで見えてきたのだが、時代の流れに抗することほど難しいことはない。



## 6月山行 今熊山から金剛の滝、小峰公園へ

皆さんが歩いたことのあるコースだと思いますが、開花の早い今年は金剛の滝周辺でイワタバコの花が見られるかもしれません。その後、金剛の滝からひと登りして雑木林の中を初夏の山野草を見ながら桜尾根を小峰公園へ下る予定です。

実施日：6月30日（金）雨天中止

集 合：9時15分 JR武蔵五日市駅改札外

※ 9:30 発京王八王子駅行きのバス（2番のりば）に乗車します。

※ （参考）立川駅発 8:26⇒拝島駅発 8:41⇒武蔵五日市駅着 9:00

行 程：武蔵五日市駅バス⇒今熊山登山口⇒今熊神社⇒今熊山⇒金剛の滝⇒小峰公園最高地点⇒小峰ビジターセンター⇒武蔵五日市駅（歩行時間約4時間）

持ち物：昼食、飲料水、敷き物、雨具、ストックなど

参加申込：6月25日（日）までに下記担当者までお申し込みください。

小林敏博

石塚嘉一

## 7月：暑気払い

例年通り、7月の第3土曜日、15日（土）を予定しておりますが、今後のコロナの動向なども考慮して6月半ばにお知らせする予定です。

## 会費納入の依頼

2023年度会費を、「振込で」お願いいたします。出来ましたら6月末日までに以下の要領にて、<年会費1500円>を、お振込み願います。

- ・ゆうちょ銀行からの振り込み 10000-18539041 「リョクソウカイ」
- ・他の金融機関からの振り込み 008-1853904 「リョクソウカイ」

※他の金融機関からの場合「支店名」は「ゼロゼロハチ」と入力してください。

※総会で集金させていただいた方もおられます。別紙を同封しましたので、ご確認願います。

## 会員異動

- ・新入会員：高橋清輝（11139）

・訃報：小泉義彦会員（14540）は4月1日ご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

## 編集後記

毎日時間があっという間に過ぎますが、季節の進み方も早く、急かされているようにさえ感じられます。それでも上野村の山開きでは満開のアカヤシオを堪能できました。今年も楽しい行事が出来るよう努めますのでよろしく願います。今号は20ページとなりました。（荒井正人）

先日、自然観察会の下見で小仏川沿いを歩きました。歩行時間40分足らずの行程で40～50種ほどの山野草を見ることができました。蛇滝口付近の千代田稲荷神社鳥居脇にはとぐろを巻いたマムシにも出会い、里山の春の盛りを感しました。気持ちの良い山歩きの時季到来です。（小林敏博）

次号予告<6月26日発行の主な内容>皆様からの投稿をお待ちしています！

5月山行報告、南川さんの連載③など